

●「京浜文学」(神奈川県) 11号

戯曲「武蔵野の家」(神谷量平)が掲載されている。戦争と戦後の歴史の狭間に翻弄される人間の姿はありそう得意外ない戯曲のテーマ。九十三歳の健筆は立派。京浜文学は九十代パワーが炸裂している。ノンフィクションの木村為蔵「地の果て西アフリカを目指して(三)」は連載ものだが、やはりこの商社マンのリアルな市場開拓体験記は、光っている。当時のアフリカの姿を、一人の日本人としてビジネスの世界で切り開いていく劇的なドラマは、ぐんぐん文章世界に引き込んでいく。生半可なフィクションでは太刀打ちできない迫真力に満ちている。またアフリカの世界を、宗教を含めて描き、ヨーロッパの近代文明がいかにその大陸を経済的に支配下に置き、搾取の構造を形成していくか、ここまで掘り下げて描いている読み物はきわめてまれであり、その意味でも価値が高い。この筆者でなければ書けないものであり、現代に生かされるべき多くのものを含んでいる。アフリカの大地で車を走らせているときに聞こえてくる「おてもやん」の歌で落涙し、ハネインという取引相手のアラブ人に慰められる場面は、ノンフィクションの枠を超えた文学である。写真も価値がある。この完結を期待したい。

●「水戸評論」(茨城県) 112号

「昭和の男」(櫻井聡)は題材がいい。軽油の密造とその廃棄物の不法投棄のアルバイトをする若者の話である。この材料は、ひじょうに大きなものを掘り当てることがある。もったいない材料だ。日本の石油の価格のかんりの割合は、道路を造り維持するために使われている。国の税金の割合が外国に比べてきわめて高く、それがまた政治的に、道路公園関連の汚職の病巣にもなっている。しかも、道路の飽和と地球の温暖化をめぐる環境問題に直面し、一つの行き詰まりを見せている領域だ。しかもここへ来て原油の高騰に見舞われている。このテーマは文学としてそこに穴を開けるドリルになりうる。もっともっと抉っていい。その

矛盾をどのようにして文学として展開し、人間の問題として提示することができるか。あくまで人間個人、人間と人間の生身のぶつかり合いを外さず、そこに現代文明と日本の現代社会の矛盾を象徴させることができたら、この作品は成功し得る。人間の悲劇にまで高めるべきだ。喰いっぱいづれた若者のアルバイトで警察に捕まるのを逃れたということでも単に終わるような問題ではない。力量と手腕も問われるテーマである。タイトルも「昭和の男」としてしまつては、ピントがずれている。「不法投棄」とか、「密造」とか、もっと直接的なふさわしい題材がありそうである。テーマの本質を深く捉え直して書き直せば、きつといい作品になる。じっくり取り組んでほしい。

●「婦人文芸」(東京都) 84号

麻生さほ「夜の足音——パリ、サンドニ通り二四九——」は、途中まですばらしかった。特にアナベルという女性の雰囲気がいい。パリの描写もいい。貧しいアパートとスイスの豪邸の対比も効いている。途中、ベッドをいっしょにするときの描写はみごとである。外国の抽象性と、過去を忘れた女性生き方と生存とがみごとにマッチしている。しかしこれがゆえに、アナベルがヒロコと名乗るところから、急にトーンが落ち、話が月並みになる。何も言わず、アナベルという存在のまま押し通してしまえばはるかによかつた。ヒロコを名乗らせ、ヒロコの過去を語るころは余計。逆に味消しになっている。またバンクックで放り出す終わり方も感心しない。締め切りで時間がなかったのか、実に惜しい作品だ。しっかりと直してもらえば優秀作に推薦できるだろう。

●「ハマ文藝」(神奈川県) 39号

「幹部候補生」(天城ひでお)は自衛隊とその生活を内側から描いたもので、戦中の軍隊との違いなどが浮き彫りになって興味深い。同人雑誌の作品には、貴重な体験を知ることのできる喜びがあつて、これもその一つである。自衛隊の一面をよく知ることのできる生

きた作品である。

「輪廻転生」(川端康成)「田中きわ子」は、川端康成の作品とその生き方をめぐる随想だが、短い中に的確に捉えて、よい作品になっている。確かな眼だ。

●「札幌文学」(北海道) 71号

高井かほる「愛人にしてください」は大胆で刺激的なタイトルで、中身はどんなだろうと思つて野次馬的に読み始めたら、雰囲気のあるしつかりした筆致で、タイトルも納得する佳品になっているので感心した。この平明な文体でこれだけじっくり書けるのは、かなりの技量で、積み重ねられた修練の厚みがある。ただ、最後にその家に入り込んでいくのはやり過ぎのように思えた。もっと遠くから永訣の思いを強くこめたほうが奥行きが出ただろう。この主人公の性格にも合っているような気がする。しかし、よい作品である。

●「風恋洞」(神奈川県) 39号

「風恋洞」は三人の雑誌であるが、よくがんばっている。小野友貴枝「貸家物語／猫を侮るな」は、乱脈な女が、真面目で人のよい男と結婚し、その男を自殺に追いやるストーリーだが、こういうタイプの女性はあまり描かれていないだけに、その女性の根の部分をも彫り抉って、その存在を人間として浮かび上がらせることができれば、深まつただろう。事件は描かれているが、それを導く人間の根が描かれていない。筆者の姿勢も含めて、もつと腰を据えないと捉えられない人間像ではある。「義理と禪」(府川昭男)は文章に活気がある。戦後まもない頃のことを描きながら、むしろその当時のことが鮮やかに迫ってくる。出だしと最後を味よく決めたらもつと完成度が得られただろう。タイトルもとつてつけたようで感心しない。

●「文芸きなり」(愛知県) 65号

女性の多い同人構成で、流れのいい文章は、同人の間でよく鍛えられている印象を覚える。全体に優雅な雰囲気のある誌だ。

「薄日」(西垣みゆき)は老舗旅館での結婚に破れて

働く仲居と強引に結婚させられて堪える板前との密かな恋愛を描く、情緒豊かな和風小説。ありそうな話のなかにも、きめ細かい情感がちりばめられていて、抑制の利いた文章は、よく人物の心理を汲み取っている。最後に新しい出発をしてまもなく脳梗塞で倒れる結末は、読者として残念。これは残された未来を味よく暗示するほうが深まったように思う。

石川好子「秋の声」は刑事の退職パーティーや新聞記者の像など生き生きと動いていいが、最後になって、思いを寄せる大学教授の娘の交通事故がわかって、いよいよこれからストーリーが動き出すというところで終わっている。「おせい」(内藤那智子)、「真実」(藤吉佐与子)、「暗渠」(近藤重郎)などよい連載物が多いが、これも連載になりそうな内容である。

「ダルガスの森」(長澤奏子)はデンマークの森を環境問題の視点から訪ねる紀行文だが、落ち着いた静かな筆致は森の気配とも合っていて、味わいのある紀行文になっている。環境問題へは長期のビジョンが重要なことも、読み進めるうちに納得させられる。ダルガスという人物への遡及も自然でいい。病を持った夫との旅行の手触りもいい。佳い紀行文である。

●「相模文芸」(神奈川県) 15号
今号も活気と賑やかさは健在で、それぞれ個性豊かな多様な同人の活力は漲っている。

「偽装」(岡田安弘)は最近の表示偽装の食品メーカーの生産に絡む殺人事件を扱っていて、小粋な推理小説になっている。社長の側も添えることでもっとおもしろくすることもできただろうが、これはこれでもとまりは得ている。

猫を扱った小説も最近増えていて、おもしろいが「**飼主**」(佐藤光代)もあたたかな視線が満ちていて、心のほぐされる動物小説だ。

三島由紀夫を扱った「**賢者への偽装**」(登芳久)も、異色な視点からの軽批評で芥子が利いている。**木内是壽「文豪の遺言」**も筆者らしいおもしろいコレクション

だ。「**映画・今年の三本**」(飛田晴吾)も明確に批評していて楽しめる。多彩な文章のおもしろみが、この誌の健脚をなしている。

●「**内海文学**」(愛媛県) 125号

「**内海文学**」は一〇〇ページに満たないボリュームだが、中身はたいへん充実している。この充実ぶりは注目に値するだろう。それぞれが、しっかりと自己のスタンスで、流れゆくものを冷静に見つめ、文化の根を大事にしつつそれを現代に生きる力に結びつけていく作業を展開している。花だけでなく、実を伴った文学活動といべきだろう。

大本邦夫「轟橋」は江戸時代將軍吉宗の頃のイナゴの大群に見舞われた天変地異と、聖人の実如の入定がストーリーになっている。武骨な、ぶつきらぼうな文体がよく合い、一つの世界を形成している。最後に典拠を明らかにし、組み合わせたことに想像を加えたところがあるが、それだけの材料でこまごま作り上げているのなら、もう一步踏み込んで実如がなぜ生きたまま地中に埋められる道を選んだか、その動機もフィクションとして作り上げてしまったらどうだったか、とも思える。イナゴの被害を食い止めるためとか、実如の思いや周囲の心情を重ねるとか、その動機が天変地異や社会の変動と繋がっていたら、もっとストーリーにダイナミックな動きが出ていただろう。市蔵の存在もやや浮いている。この土俗と繋がった確かな力は、さらに何かを産み出すものを有している。

同じ作者の「**世をあざけらむ鋭心もなし**」(会津八ノノト)も優れた評伝である。学位授与に対する八一の姿勢を漱石などと比較しながら描き、文化に対する八一の考えを厚く捉えている。八一の「文化論」は現代でも我々が大切にすべき基本の考えをよく示していて、私も勉強になった。「**文**」は、野蠻・残忍・固陋・無学・殺風景・無趣味の反対で、物やわらかで物わかりがよく、ゆとりがあつてみやびやかなことである。「**化**」とは我々の生活がしんからその「**文**」

に化すことである。「**芸術の正しい方向は、ほんとうの感激から発していること、自然であること、模倣や套習でやつてはならないこと、すつきりして統一のあること、細部の技巧を排することである**」という言葉は確かに反芻すべきだろう。「すぐれたものは時間の経過とともにかならずその輝きを増す」という八一の矜持も、銘記すべきである。短いながら、八一の人柄も考えも、鮮やかに現代に蘇る評伝は多くの人に読んでもほしいものである。

「彼女の温もり」(鈴木寂静)はたんに同窓会に出るというだけの話なのに、胸のときめきや懐かしさや、再会の喜びが生き生きと伝わってくる。長い人生をそれぞれ生き抜いてきた苦闘が人生の一つの断面として共鳴し合う。それが自分の命を見つめることに繋がるからだろう。

「踊り子の道」(平願喜)も、ただ川端康成の「**伊豆の踊り子**」の作品に沿って歩き、舞台の旅館を訪ねるというだけの軽い紀行文だが、露天風呂のエピソードを交えて、人情を清々しく重ねていく流れは、さわやかなものを残す。いい仕立てになっている。

「戦火のもとので」(堤富美)も満州事変以降の戦争の流れを女性の立場から見聞した実感から外れずに素直に書いていて、庶民からの概観に成り得るところに、良さを感じた。単純な、素朴な感慨の中に、真実が隠れている。

エッセイの「**十三夜**」(藤三保子)もしみじみとしたものを残してくれる。「人は月からこの世を守るために月下して、その仕事が終わるとまた月に帰るのだ」と私は思うの」という言葉を残して死んでいく翔子の姿が、胸に沈んでくる。

星励「般若入れ」は、レポート小説とも言えるものだが、現代の日本がどのような崩壊過程を辿ってきたか、明晰に浮かび上がらせていて、地方の変遷が手に取るように鮮やかにわかる。「般若入れ」という廃れかけた行事をどのように復興しコミュニティの新たな

活力を生み出していか、現代日本の直面している問題をよく描いている。「パブルが崩壊して不景気になる」と弱い産業が崩れ、好況と不況が繰り返されるたびに山間僻地や島の経済事情が悪くなり、それにつれて人もいなくなつた」という淡々とした叙述は、頷かされる。またこの小説はそれに留まらず、再生の道筋をもよく示している。キンケードという外国人が参加したり、大学教授や韓国人が参加したり、子供も参加して、現代は現代として心を寄せ合う所に新たなものを生み出していく活力を描いているところが希望を見せている。

全体に、文化を普段の集まりの中でしっかり討議し、認識を深め合っているところに、これらの作品が成立するのであって、その基盤の重要さを再認識させられる作品群だつた。

●「桂」(埼玉県) 5号

佃陽子「残り雪」は五十歳を超えた女性の心の動きを味わいよく描いていて、佳品である。さらさらした手触りのよい文章の中に、心の傷が見え隠れして縦糸と横糸のような綾織りを想わせる。最後の「別れましよう」にも少し陰影がつくと、さらによかつた。

「コンペヤ」(清水寛三)は、工場の生産ラインに携わる者の、機械と人間の模様を描いて、読ませる作品になつてゐる。「コンペヤ」はたんに品物を運搬する一つの手段にすぎない。しかし現実には作業の一環として組み込まれると、いつのまにかそれ自身が主人公のように人々を制御しはじめる」という部分は説得力がある。工員一人一人の生活とその暗がりに踏み込んで、機械と生身の人間の対比を強めているところがいい。これをもっと極限まで押し進めると、さらに本質的なものに迫っていきそうだ。期待したい。

「半月」(高木唯花)は、物語を作る力は十分。こういう悪魔的な女性はなかなかふつうの小説の世界ではお目にかからないだけに、おもしろい。猟奇的な世界と紙一重ではあるが、その境界を破つてもいいので、

こうした独自の領域をどんどん展開してほしい。この物語はさらに続きそうにも思える。ギリギリまで迫って行くことで、何かが見えてくると思う。この筆者も興味深いものを持つてゐる。

●「弦」(愛知県) 82号

「弦」も鍛えられている誌である。文章の端正さほどの作品にも共通している。校正もよく行き届いている。挿画も生きている。「タミフル」(川田志恩)など、昨今の事件に関連した題材も現代を映し、適度な流行の色もある。

巻頭の「セラピープロジェクト」(木戸順子)は、女性の肌とその原因になつてゐる異性関係の交錯がおもしろい。体のあちこちに吹き出物の跡があり、それは体質的に合わない夫との性によつて生じた痕跡であり、それが何よりも心の傷になつてゐる。それが原因の離婚の癒しを求めてのセラピーだが、この肉体と心理のよろさ、微妙さが、整つた文章の流れに乗つてよく表されてゐる。結局プールで会つた男によつて癒される最後は、やや安易な気もし、「心の便秘だつた」と言われて受け入れてしまふのも簡単すぎる気がするが、全体の雰囲気はかなり匂いやかに出ている。「セラピープロジェクト」と一見今風なファッションを想わせるタイトルは、現代に合せてゐる快さもあるが、逆にその陰に隠れてしまふ何かをも感じさせ、踏み込みの浅さも感じなくはない。しかし全体の端正な作りの姿は、美しいものがある。それを買つて、こじんまりとした短さを補いつつ、優秀作に推薦したい。

●「空とぶ鯨」(埼玉県) 8号

244ページの厚みはボリューム十分。大阪文学学校の同窓生で作つてゐる同人誌ということで、同人は広島、大阪、京都、東京、埼玉など全国に散らばつてゐる。地域性とは対照的な同人雑誌もある。

森ゆみ子「ほこら」は、やはり別れた男の心の癒しに、老人の空白の温かさに包まれる安心感が味よく出ている。ほっこりとしたぬくもりは、快い。老人の持

つ何十年という堪え重ねて来た時間に、自身の短い激しく傷つきやすい心の痛みを重ねて、包まれ癒される若い時間との対照が、やわらかい結節をなすところに、この小説の快い時空がある。

昨年「壺中美人」が全国同人雑誌優秀作となつた高下俊哉の作品「雲外鏡」は、やはり怪奇物のシリーズで、作者ならではの筋運びは、おもしろい。ただ今回は鏡そのものの魔性がよく表されていない。怪奇物にほしい恐怖や凄みが無い。鏡の歴史講釈の方に重点が感じられ、肝心の鏡の魔性がどこへ行つてしまつたのか不十分である。安定した完成度を毎回求めるのは難しいかもしれないが、おもしろいシリーズだけに、ぜひこの壁を突破してほしい。

●今回は女性の心の傷とその癒しに共通なテーマを持つものが少なくなく、またそれが佳い作品群になつてゐた印象が強い。「愛人にしてください」(高井かほる「札幌文学」)、「残り雪」(佃陽子「桂」)、「薄日」(西垣みゆき「文芸きなり」)、「ほこら」(森ゆみ子「空とぶ鯨」)など、その中で優秀作を挙げると言われると「セラピープロジェクト」(木戸順子「弦」)になるが、「夜の足音」(ハリ、サンドニ通り二四九)、「麻生さほ「婦人文芸」)も捨て難い。印象は「夜の足音」のほうが強い。いま挙げた作品は二作を除いてすべて準優秀作。まだ未完成の作品も多かつたが、それらはぜひ書き直して、最終的な形にしてほしい。「コンペヤ」(清水寛三「桂」)、「般若入れ」(星励「内海文学」)も準優秀作に推しておきたい。

小説以外の散文では、「地の果て西アフリカを目指して」(三)(木村為蔵「京浜文学」)、「世をあざけらむ鋭心もなし」(会津八ノート)、「大本邦夫「内海文学」)を優秀作に推し、「輪廻転生(川端康成)」「田中きわ子「ハマ文芸」)、「タルガスの森」(長澤妻子「文芸きなり」)、「戦火のもとで」(堤富美「内海文学」)「エッセイ「十三夜」(藤三保子「内海文学」)を準優秀作としておきたい。(作家集団「塊」/五十嵐勉)

■第二回全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」の公開選考会は今年も八月に行なわれるが、それまでにどんな候補作が並ぶか、楽しみである。新しく命名された全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」へ向けてさらに多くの同人雑誌が寄せられてくることを期待したい。(五)

●「内海文学」(愛媛県) 124号

「江ノ島」平 願喜 どんな長編小説になるのかと期待しながら読んでいたら、5ページで終わってしまった。男の含羞の中にちらりと無邪気な自惚れがあって、面白い作品だった。

「守護神」大本邦夫 この作品も短いわりには話がぎつしり詰まっっていて、面白く読んだ。次々現れる詐欺師のことを書いているのだが、理屈っぽい文体に納得させられた。真正面から向き合っ書いてるので好感がもてた。

●「河」(東京都) 140号・141号

「債女離魂」高森修蔵 三島由紀夫の死と、禅宗の無門関を結びつけた難しい作品だが、作者は純平の独白をかりて、「女離魂」を願っっているように読めた。しかし、難解な小説である。

編集後記に、大仏次郎の言葉の一部を書き留めてあり、「詩は青年の仕事だが、小説は老年のためにある」という挨拶が気になった。

「お前の旅の記録」書き出しから引きずり込まれる。

痛は今や3人に一人という罹患度。最近米原万里の痛との格闘記を読んだばかりだった。この作者と米原さんが違うのは、米原さんは独身で一人で闘ったことで、この場合は夫の立場から書いている。新婚旅行の部分で、両親が積極的だったことまで及んでいる。蜜柑畑で葉のついた蜜柑を、怪しくなった口調で言うところなど、愛妻家の面の筆が立つて心憎いほどである。病状経過なども、達者過ぎるのが怖いくらいである。

「キリマンジャロの朝風」櫻館弘二郎 この人も達者

で、まるでアフリカへ引きずられて行ってしまったような気持ちにさせられる。文中で裕の養子のことに触れるのも、心憎い程タイミングを心得ている。「マネーを最高」にしてしまった西欧人の泥足で踏込んだような描写も、実に説得力に溢れている。象の大群が豆粒ほどになるまで目が離せないというあたりも情に溺れない文章は強い。

「孫と暮らせば」今村裕子 題材が面白い上に、丁度私と作者と同じような立場にあるので、興味津々で読ませられた。但し、夏休み以降は蛇足ではないか。

●「頌」(東京都) 26号・27号

「花火」杉本 暁 読みながら、ひよっとしてこの作者は詩も作る人ではないか、と思いつつ25号を見たら、思ったとおり詩も書いていた。思わず傍線をひきたくなるような、小説ではなく詩の感性が感じられる文章である。主人公を年寄りのように書いているが、「欲情になりかけて思慮を抑えこまれたものが胸の中で泡立ち、そして静まるのを待つ」などの部分は若者そのものの感覚である。全体に文章を綴ったというより、詩の断片のようにも思える。

「観覧車」森野こと 小学校三年生の男の子の視点で

かかっているのだが、無理がなく読める。また学校でいじめにあっていることも説明的ではないので納得できる。ただ、時々兄の気持ちから表現が気になるが、離れていた兄と弟との会話は苦しさを感じさせない。

●「主潮」(静岡県) 26号

「祭日」「物語少女」「客地」「母の夏」と次々読んで行くにつれ、この雑誌は教師の集団ではないか、と思わせられた。そして、知識人の結集した作品に、ただ頭を垂れる思いであった。

●「埋火」(東京都) 41号

発行人・吉満昌夫の作品集。あとがきに作品の紹介がある。それによると、死に関係する作品を寄せ集めていたのだが、「さて、次号はどうする」とあるのは、作者にとつて死はまだ遠いのだ。「季刊文科」掲載の、九鬼氏の「東司まで」の感想を挙げてある。

●「無尽花」(東京都) 25号

「熊本」松本志桂子 相当書きなれた人で、暗い話を明るく書いているのに好感がもてた。巻頭作品の「熊本」は、もつとおどろおどろしくなると思っていたら、あっさり書き流した好編に仕上がっている。

「寄る年波」も、心臓、脳、癌の三つの大病を経験し

ているというのに、その明るさに脱帽の他はない。「姉妹」に至っては、抱腹絶倒とまではいかないが、笑える楽しい作品である。同じ本の中の「オールドフレンド」佐々木知恵子の作品も、事件に入る前の夫婦の若い頃の話題が感じよく、その後にはひろがる友達との付き合いもそつなく書かれている。

●「文学街」(東京都) 238号

「本掛還り」白石すみほ 由緒ある同人誌のようで、さすがに優作ぞろい、中でも「本掛還り」に目が止まった。マネキンがバックにあるのも珍しい、と思っ読んでいたが、後半は、よくありそうな男女の話になってしまった。ストーリーそのものより、マネキンの館の話題に瞠目した。描写力は頭抜けている。

●「片掬」(山梨県) 41号

「エミシヤケタ」佐藤よし子 エミシヤケタ、という題に興味を持ったので読みはじめたら、なんとそれは、「笑みしゃけた」ということで、ある地方だけで通用する里人のことばだった。

●「岡山文学」(岡山県) 96号

「ルナ」古井らじか ルナは「明治43年東京浅草六区に開設された、遊園娯楽場の名前」で、スリルがあつて面白い作品。途中からウスウス感じてはいたが、最後になって明解になる。「スリルがあつてもうたくさん」といいながら、作者自身は結構楽しんで書いている。珍しい作品だと思ひながら、作者にまんまと嵌められたのかも知れない。

●「街道」(東京都) 11号

「石神井暮色」佐々木欽三 男女の付き合いをそつなく書いた作品。主人公の視点は男性なのだが、一寸ぶれるところがある。全体として纏まった作品だが、真綿で首をしめられたような、けだるい後味を感じた。

「青い火」木下経子 この作品も男女の話だが、こ

ちらは夫婦のこと。旅行先の大沼公園の風景と祖父の暗い海でのイカ釣りは印象的である。

●「柳絮」(大阪) 72号

「朴の花」丹羽さだ 書き出しがすっきりしていて、好感のもてる作品である。女学生時代の友達は亡くなっているが、八十歳の自分が生き残っていることを、淡々と書いている。医者になる人は丈夫な人が多いという作者の「徒然草」の解釈も面白い。

●「あの日のトマト」久保三也子 定年になって家になるようになった夫が少々うつつしくなってきた話からスムーズに入っていくので、それが戦争体験に発展するとは思わず読み進んでいた。ところがなかなか達者な筆使いで、「人前でどう話せば良いのだろう」と言いながらとうとうと述べる言葉に思わず引き込まれる。末尾の「おばあちゃん、トマトこわいのん」の締めくくりもうまい。

●「弦」(愛知県) 79号・80号・81号

「午後の庭園」淡々とした文章で淡々とした内容ながら、人間の生活と猫をからめて事件を進めていくのは、なかなかの手腕。結末もあつさりしているようだが、深い意味を感じさせる。

80号は力作揃いだと思ったら、記念号であった。達者な書き手が多く、とても全部は取り上げがたい。そこで、「80号記念・総目次を編んで」中村賢三」を読んでいる。その間他誌との合併などもあり、本当に書きたい人の、上手な人の集団であることを知る。

●「耳の記憶」木下順子 53枚とは思えない充実した内容であり、筆致もあくまで冷静である。文中の、冬の庭は淋しいが、にはじまる植物の命の再生は、情緒にながされやすい老人の話の中では珍しく、凜とした描写である。ただし、最後を昔の男達のことと締めくくらないほうがよかつたのではないだろうか。

●「城」(愛知県) 92号

「終りなき行軍損耗」池部正臣 戦記である。真木の独自に近い文体でかかれていて、他者を描写していることよって、多人数の視点にも感じられる。なにより臨場感のある作品に仕上がった作者の腕前を賞賛

したい。昔話に終わらせたくない作品である。

●「米子文学」(鳥取県) 52号

「艶福家登場」拜藤昇一 作者は絵も描く人で、多芸に秀でた才能をお持ちの方のようである。お墓の話からはじまって、劇中劇あり、教訓的箇所ありで感心させられた。「祖父が残したのは、墓地や孫のほかにもあつたのだ」と意味ありげな甚六の語り口調は手堅いものがある。

●「渚みち」野坂喜美 中ほどにある、「渚のみちは立ち止まってはいけない道ですね」「そうだよ、人の一生も同じだよ。立ち止まったら転がるだけだ」という会話から受け取るものが多い。安来節を横糸に、男女の関係を縦糸に進んで行く話のうまさ、なかなかのものである。「安来節はうたい終ればあとに何ものこらなかつたが、直ぐにまたうたうたうたうた見たくなる。二人の関係も同じであつた」のフレーズはこの題材のすべてをかたっている。

なお、他の作品も佳作ぞろいであつた。

●「湧水」(東京都) 37号

「アロハオエ」千尋 この作品はどちらかといえばどこにでもありそうな話なのに、飽きない。主人公は翻訳家を目指しているが思うようにいかない。だからと言って自棄にもならず、他の方へ目を向けようとしてもしない。家族関係もさり気なく書かれていて、ゴチャゴチャしていない。犬のテンの配置もいい。本質的に明るい性格に生れついた春香は不満を漏らさない。そして最後に「アロハシヤツが買いたい、すごい派手なやつ」のせりふで全て了解。無駄のない作家。

●「頌」(東京都) 21号・22号・23号

全編に若い作家の集団だが、戦争を取り上げた作品が多かつた。この号も、「上海帰りのリル」と「ミノムシの夏」。戦争の悲惨さを人から聞いて書いた中身ではあるが結構深く濃い。筆者のように戦争体験者にもうなずける書き方は好感がもてた。

「本郷雑記」小田原漂情 軽い気持ちで読んで居ると、

とんでもない深刻な問題を抱えた作品である。

「ヘテログラフト」小原優作 「ブタの胚細胞がマウスの臓器に……」という前書きだけを見ても、かなりの長編になりそう。病院問題は気軽に読めるものではない。いずれにしても作者の広範囲な知識と題材に敬意を表する。

●「文学世紀」(東京都) 33号

「伏木」遠矢徹彦 男性的なロマンのある作品。短編でありながら、女のこと、母親のこと、三里塚のことなどが手にとるように伝わってくる。後記にもあるが、作者は、「文章を執拗なほど吟味する」のを正に本道として綴っている。それがあつた部分では読者の心をつくすぐる良さであり、またややうんざりさせる部分でもある。いずれにしても硬質なものにも温かさのある佳品であつた。

●「獣神」(埼玉県) 83号

「ほたり、すん」「ほたり、すん」という題名の意味がわからないまま読み始めた。ところが、作者は複雑な女の心理と友情？を物凄く上手に書いている。頭によすぎる雅美に翻弄されながら、ふふん、ふふんと頷いてしまった。

●「街道」9号・10号

「利男追悼・雷鳥沢」木下徑子 かなりかける人だと承知しながら読みはじめたが、案の定抑制の効いた文章に引き摺り込まれた。利男の人となりを愛情のこもつた描写で表している。

書き手の多い誌で、どれも読まされてしまった。その結果、「エッセイと紀行」の頁に至り、感嘆した。「書く者の宿命おう惱」松尾陸子 読み進むうち、作者はもしかして男性なのでは、と言う思いにかられた。男性なら理論的、女性なら情緒的と決めつけるつもりはないが、こんなにも理路整然と「書くことへのおう惱」を解説できるものかと感動したのである。

(島田和世)